

主 題：生きるために死ぬ 2

聖書箇所：マルコの福音書 8章34－38節

「イエス・キリストをあなたの心に迎え入れてください。」「そのままイエスのもとに来てください。」、そのようなことば、また、それに似たたくさんのことばが今、現在のキリスト教会の中にあって福音の中心的メッセージになっています。イエス・キリストを信じていない何億という人たちに、何とかして福音を伝えたい、イエス・キリストの良い知らせを信じてもらいたいと心から願う多くのクリスチャンたちは、その方法を一生懸命見つけようとしてきました。その結果、彼らは聖書が教えるその基準を下げ、救いの門をできるだけ広くしようと努力したのです。それをするために、残念ながら、クリスチャンたちは福音の真理に水を加え、それを薄いものにし、そして、聖書が教える「どうすれば永遠のいのちを受けることができるのか」という条件を、新しい定義と置き換えました。そのような努力の中で、今日私たちが多くの説教者たちの口から聞くことができることばは、新しいクリスチャンの区分に関するものです。彼らはこのように言います。クリスチャンには二種類ある、一つは信じて救いを得ただけのクリスチャン、同時に、もう一つの種類のクリスチャンは信じて救われているだけでなく、彼らは献身して弟子となったと言います。つまり、彼らはクリスチャンには献身しているクリスチャンと献身していないクリスチャンがいると言うのです。神に従って行くという決意をしたクリスチャンと、その決意はまだしていないけれど救われているだけのクリスチャンがいると言うのです。そうするなら、何となく「私は信じます」と言うなら、その人たちはそれでクリスチャンになることができるのです。従いなさい、～をしなさいというのは、献身的なクリスチャンのことであって、一般的なクリスチャンにそれは特に要求されていない、むしろ、クリスチャンになるための条件ではないと、そのように定義し始めたのです。けれども、みことばを見ると、そのような区分の仕方は聖書に見出すことができません。特に、私たちの主イエス・キリストが語ることばを見ると、そのような区分を見出すことはできません。イエス・キリストが福音を語られたときに、そこには常に真剣なイエス・キリストへの献身が含まれていました。単にイエスを心に迎え入れるということではなかったのです。そこには、先週見たように「自分を捨て、自分の十字架を負って、イエス・キリストに従って行く」という献身が含まれていたのです。

20世紀の偉大な説教者の一人、ジェームズ・ボイスという先生はその書かれた註解書の中で、このようなことばを記しています。「20世紀のキリスト教会には、真の弟子の欠如という欠陥、いや致命的な欠陥が存在する。本物のクリスチャンにとって、弟子であるということはすべてを捨ててキリストに従うことである。しかし、今日の多くのクリスチャンと呼ばれる人たち、もしかすると、ほとんどのクリスチャンだと自称する人たちに見られるのは、キリストについて多くを語り、また主の御名によって多くの熱心な活動がなされていても、キリストご自身に従うということが実際にはほとんど行なわれていないという現実である。このことは、あるグループの中では、本当のキリスト教をほとんど見ることができないということを表わしている。キリストを熱心に『主よ、主よ』と呼び求める多くの者はクリスチャンではないのだ」と。そして、彼はこのように続けます。「私はこれを1986年に書いた。しかし、状況は今も全く改善されていない（この註解書は90年代に記されています）。事実、悪くなっているとんでもないだろう。何が問題なのか、我々はこのような教えが嫌なのだ。繁栄なら喜んで受け入れよう、勝利なら大きくうなずくだろう。しかし、苦しみ？死？十字架？我々はそのようなことを聞きたくないのだ。だが、これらのことなしに本当のキリスト教は成立しない。イエスが自分に従う者たちに、自分を捨て、自分の十字架を負って、主に従うように告げた時、イエスはこれらの事柄が、弟子であることがどういうことなのかを示す一枚の絵を構成するのだと語ったのだ。これらはすべて必要なものなのだ。」と。

確かに、先週私たちが見始めたマルコの福音書8：34－38の部分は、イエスが弟子を召す、弟子を招くことばが記されていました。しかも、ここでイエスが挙げる要求は、イエスが語ったありとあらゆる要求の中でも最も過激な、最も高い要求だと言っても過言ではありません。それゆえに、ある人たちはこの箇所を見て、ほら見なさい、これは救いへの招きではなく、救われたクリスチャンが弟子となるための招きであると言います。本当にそうなのでしょうか？本当にイエスが「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われたことばは、救いの条件ではなくて、救われた者たちがより献身的な歩みをするための召しなのでしょう？

今朝、皆さんと一緒にこのことを見て行きます。先週私たちはこの箇所から、「イエスがいったい何を要求したのか」ということを考えました。そして、イエスはその要求の説明を35－38節で私たちに

してくれています。「なぜ、私たちがこの過激で非常に大きな犠牲を伴う要求を受け入れなければならないのか？」その理由をイエスは私たちに示してくれます。今日、皆さんとこの箇所を見て、その理由を一つ一つ考えて行きましょう。そして、私が心から願うことは、皆さんがこの要求を受け入れることです。ここにおられるすべての人がこの要求に耳を貸し、この要求に対して「はい、分かりました。私はそうします！」と言って決断しなければいけないのです。イエスはその理由を私たちに教えてください。「そうすべきである」ということを明確に教えてください。願わくは、神の助けによって、そのことを皆さんも同じように知り、まだ、その決心をされていない方がおられるなら、その決心を今この時にする機会となるように。また、もう既にその決心をされた方は、その決心にますます堅く立って、私たちが自分を捨て、自分の十字架を負って、主に従う者になって行くようにと願います。

☆イエス・キリストが私たちに要求していること

(1. イエス・キリストは何を要求したのか? → 先週)

2. イエス・キリストはなぜ私たちに要求したのか?

イエスは、マルコ 8 : 34-38 で「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得があらましよう。:37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。:38 このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」と言います。

最も過激な要求をされた後、イエスは私たちになぜそのような要求を私たちが飲まなければならないのかという説明をしてくれています。たとえ、それがまだイエス・キリストを信じていない群衆であったとしても、たとえ、それがもう既にその決心をし、すべてを捨ててイエスにこの二年間従い続けて来た弟子たちであったとしても、イエスは彼らに向かって「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と同じ要求を告げられたのです。なぜ、そのような大きな犠牲を払ってまで、イエスを受け入れ、イエスに従って行かなければいけないのでしょうか？イエスはここでその理由を私たちに明らかにしてくれます。残念ながら、日本語の聖書には 35 節から 38 節まで、それを明確に記すために使われていることばを翻訳していません。もし、皆さんが嫌でなければ、35-38 節のそれぞれの節の最初に「なぜなら」ということばを加えてください。それぞれの節の最初に、イエスは「なぜなら…」と語っておられます。それらはすべて、この 34 節を説明するのです。イエスは私たちになぜそれをしななければいけないのかを教えてください。

その理由は明らかです。ここでイエスが要求されていることは、ありとあらゆるものを捨ててわたしを得なさいということです。なぜ、そのようなことをしななければいけないのでしょうか？そこにいったい何の得があるのでしょうか？そのような疑問を人々が抱く時に、それでもなおイエス・キリストに従うことを選択しなければならないというその根拠をイエスが語ろうとしているのです。いったい、まともな人間が、なぜすべてを捨てて、十字架を負って、イエス・キリストに従わなければいけないのか？イエスの答えを見てみましょう。

1) いのちを失うことはいのちを救うことに勝っているから

最初に、イエスは「いのちを失うことはいのちを救うことに勝っている」と言います。35 節「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」と、このことばは非常に矛盾した表現に聞こえます。イエスはあえてこのようなことばを使って私たちの注意を引こうとしているのです。強調したいことがあるのです。ここで私たちが混乱してしまいがちな理由は何かという、それはこの「いのち」ということばの意味です。ここで使われている「いのち」と訳されていることばは、一般的に聖書の中では「たましい」と訳することができることばです。ここで言われている「いのち」というのは、私たちが実際持っているいのちのことです。私たちのいのちの源、私自身のいのちを示すことばです。けれども、この節でイエスはこの「いのち」ということばを、実は二つの違った意味合いで使い分けています。同じことばですが意味が少し違って使われているから、私たちは混乱するのです。ある註解書はこのことばをこのように説明しています。「この「いのち」ということばは、ここでは下等な意味、低い意味と、高等な意味、高い意味とに分けられて使われている。二つの宣言、最初の「いのち」は、外面的なこの地上でのいのち、その喜びやそれらの目的、そのような事柄を表わしているものであり、二番目は日本語の聖書ではそれぞれ「それ」と訳されているそのことばは、霊的ないのち、内面的ないのち、この地上で始まり永遠へと至るいのちのことを意味している。」というわけです。

そのことをしっかりと頭に入れて、イエスのことばを聞くなら、私たちはここで言っていることをはっきり理解することができます。イエスがこの 35 節で日本語では「いのち」と訳されていることばを、

地上のいのち、外面的ないのち、この地上でのありとあらゆる事柄と捉えて読むなら、そして「それ」と訳されていることばを内面的ないのち、霊的ないのち、この地上で始まり永遠へと続いて行くものであると考えるなら、イエスが言っていることははっきりして来ます。イエスがここで言うことは、この地上で一生懸命今持っているいのちを、この地上での事柄を一生懸命保とう、救おうとしている人たちは、永遠に続く霊的ないのちを失うのだと言うのです。逆に、その地上でのいのちを、ありとあらゆる事柄をイエス・キリストとその福音のために失うなら、その人は永遠に続くそのいのちを救うのだというのです。ここで使われている「失う」ということばは「滅ぼす」と訳することができます。イエスが言っていることははっきりしているのです。もし、私たちがこの地上の事柄、地上でのいのち、そこに伴うさまざまな喜びや私たちの願い、目的、そのようなものを一生懸命保とうとしているなら、それによって私たちは永遠に続いて行くいのちを滅ぼしてしまうというのです。逆に、私たちがそれを主のために滅ぼして行くなら、別の言い方をすれば、自分を捨て、自分の十字架を負って、イエス・キリストに従うなら、あなたは永遠に続くいのちを救うというのです。

もう一つのことばに私たちは注目しなければいけません。それは、35節の前半に出てくる「いのちを救おうと思う者」というこの「思う」ということばです。これは34節でも「だれでもわたしについて来たいと思うなら、」とありましたが、先週、そのときに説明したように、これは「願望、願い」のことです。そういう「願いをもつなら」というのです。つまり、イエスは私たち人間には選択があると言います。あなたはわたしについて来たいと思いますか？それとも自分のいのちを救おうと思いますか？そのどちらかの選択があると言うのです。私たちは意志をもってそれを決めなければいけません。私たちは何を願うのかをはっきりさせなければいけないのです。私たちはイエス・キリストの要求に従って、イエス・キリストに従うことを決めるのか、それとも、この地上での生活を保とうとするゆえに自分自身に従うのか、その選択があるというのです。ここには二つの道しかありません。白か黒しかないのです。皆さんは自分のいのちを救うか、それとも自分のいのちを失うか、その選択をしなければいけないのです。

私たちが覚えておかなければいけないことは、イエスが語っているこのことば、その内容がイエスがここでしか語らなかった、ただ一回だけしか出て来なかったことではありません。イエスはご自身の働きの中で、このことを何度も何度も繰り返し話されています。

◎マタイの福音書10：37-38

例えば、マタイ10：37-39のところで、イエスはこのようにことを語っておられます。これは、このマルコに記されている出来事よりも前に起こった出来事です。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。：38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。：39 自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」、言われていることは同じです。この地上の事柄に思いを寄せ続ける人はわたしにはふさわしくないとイエスは言うのです。自分の十字架を負わない者はわたしにはふさわしくないと、自分の持っている悪の性質に対して私は死ぬのだと言って死の行進を始めることがなければ、その人物はわたしにはふさわしくないと言います。

◎ルカの福音書8：14

それだけではありません。イエスは例え話の中でこのようなことを語られました。皆さんもよく知っておられる種まきの例えの中で、一つの種はいばらの地に落ちました。その種に関してイエスはこのような説明をされています。ルカの福音書8：14「**いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかひや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。**」、みことばを聞いてみことばの福音の種は芽を出します。ところが、芽が出て来てもいばらとその芽の成長を妨げるのです。それはいったい何でしょう？この世の心づかひや富や快樂、地上の事柄によってふさがれて実が熟するまでに至らないとイエスは言います。

◎ルカの福音書14：16-24

マルコ8章の後もイエスは続けて同じ内容の話をされています。例えば、パリサイ人たちと一緒に食事をしていたある日、イエスは彼らとの会話の中でこのようなことばを語られました。ある一つの例え話をされるのです。ルカの福音書14：16-24のところにそれが記されています。ある人が盛大な宴会を催します。大勢の人が招かれます。そして、宴会の当日になって『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。』と誘いが来ます。そうすると、招待を受けた人たちが皆同じように断り始めたというのです。最初の人『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』、次の人『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』、また、別の人は『結婚したので、行くことができません。』と、みな一様に断るのです。そして、その例え話の最後でイエスは「**言うておくが、あの招待されていた人**

たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです。』』とまとめます。なぜでしょう？なぜなら、彼らは招待を受けていたにもかかわらず、この世の事柄に目を配り、それらに熱心であったゆえに、実際に祝宴に来ることを拒んだのです。

◎ルカの福音書 9：59－62

イエスは弟子になりたいと願っていた人たちに対してこのようなことばを語っています。このことばはルカの福音書 9：62 に記されています。イエスは「**だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。**」と言うのです。何のことか分かりますか？皆さん、想像してください。農耕馬でも牛でも何でも構いません。それに鋤がついているわけです。そして、皆さんはそれに手をかけて牛や馬をコントロールして畑を耕すのです。そのときに、もしあなたが後ろを振り向いたなら、きちんと前を見て真っ直ぐに行かないから、その畑はぐにやぐにやになりませんか？イエスは言うのです。「もしあなたが神の国に手をかけていながら、後ろを振り向き続けるなら、あなたは神の国にふさわしくない」と。その前のところで、イエスは「わたしについて来なさい。」とある人に言います。そうすると、その人は「**まず行って、私の父を葬ることを許してください。**」と言います。するとイエスは彼らに言います。「**死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。**」別の人がイエス様にこう言うのです。「**主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。**」、そこでイエスはこのことばを言うのです。「**手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。**」と。

マルコの福音書 8：35 に戻っていただいて、私たちはイエスが対比を明確にしていることに気づかなければいけません。ここで「**いのちを救おうと思う者はそれを失い、**」に対して、「**わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。**」とイエスは言います。何を強調したいのか分かりますか？後半には「**思う**」ということばがありません。つまり、私と福音のためにいのちを失いたいと思っている人のことを言っているのではないのです。いのちを失っている人のことを言っているのです。もうその選択はされたのです。確かに、自分のいのちを失っているのです。本当の弟子というのとは、自分自身を捨て、自分の十字架を負って、キリストが歩んだ道を真っ直ぐに歩いて行く者です。その人はその歩みをもう始めているのです。だから、「私はそうしたいと思うのです」と言っている人ではなくて、実際に失っている人がそれを救うのだとイエスは言うのです。この人はもう自分のために生きることをしませんが、この人は自分自身を捨てたのです。本当の弟子とは、神に仕えるためにありとあらゆるものを放棄した人です。本当の弟子は、キリストのゆえに、自分にとって最善だと思っていたありとあらゆることを、それらは私には必要がないと言うようになった者です。それが本当の弟子なのです。イエスが言うのは、自分自身の終わりのことです。自分が自分に死ぬことです。キリストのゆえに、ありとあらゆることをちりあくただと思うのです。

パウロのことばを借りるなら、それは「**私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。**」ということです。「私が生きて行くのはキリストのため以外に何もありません、私がこの地上で生きるその目的は、いつの日かキリストとともに完全な姿をもって、復活のからだにあずかることです。それを心から待ち望むゆえに、私は今まで得て来たありとあらゆるものをゴミと考へ、たとえ、私がそのいのちを失ったとしても、私はそれを何よりもすばらしいことだと思ひます。なぜなら、私が生きてきた目的は、この罪のからだから解放されて主のもとに行くことだから」と。パウロはガラテヤの手紙 2：20 で「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。**」とも言いました。私はもう生きていません、私のうちにキリストが生きています。自己の終焉です。永遠に生きるためにあなたは自分自身に対して死になさいと、イエスはそうように求めておられるのです。

このような決断をそのような意志をもって選択をした者だけがキリストにあって「いのち」を見出すことができるのです。中途半端な献身ではだめなのです。自分の生涯にしがみつきながら、イエス・キリストに従うことはできないのです。イエスに従うことのない信仰がたどり着くのは永遠の滅びでしかないのです。だから、すべての人はこの要求を飲まなければいけないのです。だから、すべての人はキリストのゆえにすべてを捨てなければいけないのです。キリストの福音のゆえにそれを捨てなければいけないのです。なぜなら、キリストの福音こそキリストがだれであるのかを明確に示すことだからです。この二つを切り離すことはできません。弟子になることを抜きにして、自分のいのちを一生懸命保とうと思っても、それは聖書が教える生き方ではありません。イエスは皆さんに対して、自分に従うのを止めて、わたしに従って来なさいと言うのです。イエスは自分にしがみつきのを止めて、この世にしがみつきのを止めて、わたしにだけしがみつきなさいと言われます。わたしの後を歩んで来なさい、自分自身の死に向かって死の行進を始めなさい、自分を捨てなさい、そして、わたしに従って来なさいと言う

のです。それ以外に天国への道はありません。皆さん、厳しい過激な要求です。非常に高い要求です。どうして私はそんなことまでしてイエスに従わなければいけないのでしょうか？という疑問が出て当然かもしれません。でも、従うべきなのです。なぜなら、皆さんのいのちの問題だからです。だれであっても、「いのちを救おうと思う者はそれを失い、」イエスと「福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」

2) いのちを得ることは全世界を得ることよりも良いことだから

二番目の理由としてイエスが挙げるのは「いのちを得ることは全世界を得ることよりも良い」ということです。イエスはこのことを二つの質問を通して私たちに明確にしています。先ほども話したように、イエスが求めることは非常に困難な要求でした。だれも自分自身のすべてを捨ててイエスに従うことは簡単なことだとは思いません。けれども、イエスはその要求をされたのです。では、いったいどうしてそのことをしなければいけないのでしょうか？そのようなことをする価値はどこにあるのでしょうか？そのことをイエスはここで私たちにしっかりと教えようとしているのです。それでイエスはここで、あえて非常に経済的な概念を用いて私たちに話をしておられます。損得の話です。イエスはそのことを通して、私たちにイエス・キリストに従うことほど得となることはないし、それほど大事なことはないのだという話をしています。

質問1. 人は、たとえ全世界を得てもいのちを損じたら何の得がありますか？

36節を見てください。「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。」、ここは非常に大げさな表現、誇大表現を使っています。あえてイエスはこのようなことばを使って、いのちを得ることと全世界を得ることを対比しているのです。だれも一人の人間が世界のすべてを自分のものとすることはできません。でも、もし仮にそれができたとして、その結果、あなたがいのちを失うことになったとしたらあなたはそれで得になりますか？皆さんは欲しいと願っているものがあるかもしれません。それらすべてを手に入れたとして、あなたが生きていかなかったらいったい何の得になりますか？難しい質問ではありません。たとえ、全世界が自分のものであったとしても、いのちを失ってしまったら一切得にはなりません。皆さん、イエスが語られた例え話を思い出しませんか？ルカの福音書12章に記されているある一人の金持ちの話です。イエスはその例え話をすると当たって、ルカの福音書12:15「**どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。**」と告げられてから例え話をされました。愚かな金持ちの話です。金持ちの家が豊作でした。考えられないほど多くの蓄えができました。それで彼は新しく蔵を建てて、そこにたくさんの収穫を貯蔵して自分自身に言ったのです。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」と。そのときに神は言われます。12:20「**しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』**」と。皆さん、イエスがまとめて何を言われたか覚えていますか？21節「**自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。**」、自分のためにたくわえても、神の前に富まない者は愚かだ、かわいそうな者だと言われます。

文脈というのはおもしろいものです。この先イエスのことばを追って行くと、イエスは12:33-34で「**持ち物売って、施しをしなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません。34 あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。**」と語られます。イエスは、この地上に一生懸命宝をためるのではなくて、朽ちない宝を天にたくわえなさいと言っているのです。イエスが言わんとしていることははっきりしています。この地上でのありとあらゆる魅力的な事柄、それが財産であったとしても、それが地位であったとしても、名誉であったとしても、それがたとえ何であっても、たとえそれが私たちの毎日の生活の中で必要だと私たちが考えることであっても、それは私たちにとって何の価値ももたらさない、私たちに有益にならないというのです。私たちが神の前に富んだ者でなければ、私たちは自分たちが愚か者であることを証明するのだと言います。私たちの心がどこにあるか知っていますか？私たちの心があるところに宝がたくわえられているわけではありませんか？もし、私たちが神の前に富んでいないとするなら、私たちの心はこの地上にあります。イエスは言います。自分を捨てなさい、自分を十字架につけなさいと。イエスは言うのです。あなたの地上にあるその心を天に持って来なさい、もう地上の事柄を追うのは止めなさいと。このルカの福音書12章の文脈の中で、先ほど言った愚かな金持ちの例えと、今言った宝を天に積むということ、その間にイエスは12:31で「**何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。**」と言っておられます。ありとあらゆることを心配するのをやめて、まず神の国を求めなければいけませんよ、それがあなたたちにとって一番大切なことなのですと。皆さん、どうすればそれができるようになると思いいますか？どうすればこの地上の事柄ではなく、神の事柄に目を向けて、それを第一として生きて行くことができるのでしょうか？

どうすれば飲むものや食べるものや着るものに心を奪われるのではなく、神がそれらの必要を知っているから、私はただただ神の国を求めて生きて行くのだと言うことができるようになるのでしょうか？イエスは言いました、「自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい」と。

たとえ、皆さんが自分の求めるすべての物を手に入れたとしても皆さんは神の前に裸で立ちます。この質問を通して、イエスは神の前に豊かになるように人々に問いかけているのです。地上での宝は天において意味のないものです。あなたはどちらを選択されますか？イエスは「自分を捨てずに自分を救おうと願う者は、神の前にあって愚か者だ」と言うのです。

質問2. 何を差し出せば自分のいのちを買い戻すことができますか。

二番目の質問は37節に記されています。「**自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。**」と。そこでイエスはこのような愚かな選択をして、自分のいのちではなくこの世のものを求めた人たちに対する、その愚かさを最大限表現しているのです。「**自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。**」一、答えは何ですか？答えは「何ともありません。」です。いったい、何を手に入れたら私たちは自分のいのちを贖うことができるのでしょうか？何もないのです。失われたいのちを買い戻すことができるものはこの地上には一切ないのです。それなのにどうしてあなたは地上での宝を求めて、地上での自分自身を一生懸命保とうとして、「自分を捨てて、自分の十字架を負って、わたしに従うこと」をしないのか？そんな空しいことはないでしょう。パウロは言います、罪の報いは死であると。それを唯一解決するのはイエス・キリストによって与えられる救いしかない、キリストによって救われるために、イエスは私たちに求めるのです。自分の十字架を負ってわたしに従って来なさい、自分を捨てなさいと。

ヨハネは、ヨハネ第一の手紙の中で2：15－17「**世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。：16 全ての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。：17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。**」と告げています。はっきりしています。イエスは難しいことを私たち言われているわけではありません。イエス・キリストを選択しないこと、イエス・キリストに従わないことは愚かなことなのです。自分のいのちを買い戻すために人はいったい何を差し出すことができるのでしょうか？今朝、皆さんが聞かなければいけない質問はこれです。皆さんは愚か者かどうかということです。覚えておられますか？イエスはこのことばを二つのグループの人たちに話しました。一つはもう既に献身していた弟子たちでした。イエスはこのことばを彼らへの励ましとして語りました。彼らを選んだ選択がいかに正しいか、いかに価値のある選択だったのかを彼らに思い起こさせたいわけですが、彼らがその人生の過程の中であって、たとえふらつくことがあったとしても、あなたたちがした選択は正しかったのだ、だから、ここに留まらなければいけないということを熱心に彼らに勧めています。同時に、このメッセージは救われていなかった群衆にも語られていました。彼らに対してイエスは福音のメッセージをしたのです。いのちのことです。イエスは救いを得るためにあなたたちがしなければいけないことは、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従うことだ、たとえば、それが困難なことだとあなたが思ったとしても、あなたがやらなければならないことはこれです。なぜなら、それをしなかったら大変なことが起こります、永遠のいのちに関わることだと言われました。皆さん、みことばは今皆さんにこのことを求めているのです。あなたがそれをしなければいけないと。

3) 自分自身を否定する方が主に否定されるよりもはるかにすばらしいことだから

三番目にイエスはこのことを説明されます。「自分自身を否定する方が主に否定されるよりもはるかにすばらしいことだ」と。これは人々の結果を表わします。イエス・キリストの要求を受け入れず、イエスに従うことをしなかった人たちに何が待ち受けているのか？イエスは明確にされます。それをもって、このことがいかに真剣な事柄であって、人々がこの要求をどうしても飲まなければいけないということを説明しています。イエスは言います。38節「**このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。**」と。実は、35節にも38節にも「**だれでも**」ということばが付いているのです。イエスはこのことばを非常に広い範囲の人たち、事実、すべての人に適用しています。どんな人でも「**わたしとわたしのことばを恥じるような者**」にはこういう結末が待ち受けていますと言います。その状況はどのようなものでしょう？今、「**わたしとわたしのことばを恥じるような者**」、それが特徴なのです。この「**恥じる**」ということばがここで言われている人が持っている状態を表わしています。このことばは「**どちらかの側に立つこと**」を表わしています。つまり、キリストに従いキリストを受け入れ、キリストとともに歩む、キリストの後をついて歩むということのゆえに起こって来る、様々な嘲り、困難、辱め、また、迫害、そのようなものを避けるためにこの世の側に付くことです。これはイエス・キリストを否定し、

この世から受け入れられることを願う姿を表わしているのです。そして、彼らが受け入れられたいと願っていること、むしろ、自分の身を置きたいと願っているこの世というのは「**姦淫と罪の時代**」だとイエスは言うのです。「姦淫と罪の世代」と訳すことができるかもしれませんが。この「**姦淫**」というのは霊的な姦淫を指しています。本当の神を神とするのではなく、造られた様々な神々、むしろ、自分自身を神とし、それに仕え、それに従い、それゆえに起こってくる様々な道徳的な罪を犯す、そのような人々です。その中にあって、イエス・キリストに付くよりも、私は世の中の人たちとともに歩みますと言って人々たちです。イエスはここである特定のグループの人たちと、その人たちの持つ結末について話をしているのです。だれでもキリストとキリストのことばを恥じる者には、このような結末が起こるのだと。これらの人々たちに対してイエスは呪いのことばをかけます。イエスは言います。「**人の子も…そのような人のことを恥じます**」と。

イエスは31節のところで言われました。「**それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、**」、わたしは人々に捨てられ、殺される、けれども、栄光によって帰って来ると、その日を知っているのです。そして、その日に、この地上の支配者として間違いなく立たれるその時に、イエスは「わたしはあなたを恥じる」、「わたしはあなたの側には立たない」、「あなたがたと関わりを持ちたくないと言って恥じたのと同じように、わたしはその日あなたに対してわたしはあなたと関わりがないと言う」と言われるのです。キリストがご自身を否定する者と親密な関係を持つことはできません。それをされません。私たちはイエスが語っていることばをしっかりと覚えなければいけないのです。だれでも「**わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、…**」、わたしも「**そのような人のことを恥じます。**」。この文脈でイエスが語られたことばは何でしょう？34節です。イエスは言われました。「**だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。**」と。このようにしていると人々は「なぜあなたはそんなことをするのですか？」、「何か問題でもあったのですか？かわいそうに！」と言います。楽しいことができなくなる、あのように熱心なクリスチャンはうっとおしいと。それを恥じて、それを嫌だと思って、だから、私は自分を保ち、自分を十字架につけるのを止め、自分に従って生きて行きますと言うなら、イエスはあなたのことを恥じるのです。

このことばはここで言われているだけではありません。イエスのことばは他の箇所でもう既に見たように、イエスの福音でありイエスが語った真理です。それゆえに、パウロはローマ1：16で「**私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**」と言います。パウロはテモテへの手紙第二1：8でテモテに対して「**ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをもとにしてください。**」と言います。同じことばです。私は救われてキリストにすべてを捧げました、だから、私は福音を恥とはしませんと。なぜなら、これこそ私のすべてだからです、だから、テモテ、あなたもそれを恥じてはいけません、あなたも救われたでしょう？と。パウロは、ローマ人への手紙6：21で、ここでも「**恥じ**」ということばを使っています。「**その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。**」と、今度は違うことを恥じています。パウロは「**その当時**」、私たちがまだ救われていない時、「**今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。**」と言います。皆さんよく覚えてください。私たちは自分を捨てて、今までの生き方を恥じたのです。それらの行き着くところは死でしかなかったのです。でも、今私たちはキリストに従う決心をし、キリストによって救われたゆえに、キリストを恥とはしないのです。キリストに従って行く、その歩みが私たちにとって何よりも喜びなのです。マタイの福音書7章のところでイエスは「**主よ、主よ。**」と言う者がたくさん出てくると言われました。7：22「**その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』**と。しかし、イエスは『**わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。**』と言われます。ルカの福音書にはこのように書かれています。13：26「**すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』**、あなたと関係をもっていたではないですか、あなたと一緒にいてすばらしい働きをしたではないですかと。イエスはその者たちに何と言われましたか？『**私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。**』。彼らがイエスを知っていると聞いたこと、それが間違っていたわけではありません。彼らは確かにイエスのことを知っていました。イエスと一緒にいたのでしょう。イエスの名によって働きをしたのでしょう。そのことは一切否定されていません。否定されているのは、彼らが神のみこころを行なわなかったということです。彼らは、私はイエスを知っているといいながら、神のみこころを行なわなかったと言うのです。彼らはイエスを知

っていると言いながら、自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従うことはなかったのです。それゆえに、彼らの歩いた道は義の道ではなくて不法の道だったのです。それゆえに、キリストは終わりの日に彼らを拒むのです。

もし、最初にお読みしたボイス先生のことばが正しいとするなら、今現在、キリスト教会には自分は救われていると思っているクリスチャンがたくさんいます。もっと正確に言いましょう。自分が救われていると考えているけれど、実は救われていない人たちがたくさんいます。もしかすると、この中にもおられるかもしれません。彼らは皆「私はイエスさまを信じています」と言います。でもイエスは、「ではあなたはわたしに従っていますか？」と尋ねます。彼らは言うでしょう、「私はこんなにいっぱい働きをしています」、「毎週教会に来ています」、「こんなに熱心です」、「こんなに祈っています」と。イエスは「あなたは自分を捨てましたか？自分の十字架を負って生きていますか？あなたはわたしだけに依存して義を求めて生きていますか？わたしに従っていますか？」と言われるでしょう。

ヨハネはIヨハネ2：6で「**神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。**」と言っています。キリスト教というのは、自分のしたいことをしようと思っている人たちのものではありません。自分のしたいことをそのとおりにしよう願っている人たちのものではありません。キリスト教というのは、たとえ自分のしたいことが何であったとしても、キリストが私にきなさいと命じることであるなら「私はほかのすべてを捨ててそれを行ないます」と言う人たちのものです。そして、イエスはそれを受け入れないことほど愚かなことはないと言います。なぜなら、これしか永遠のいのちに至る道はないから、ここにしかいのちを見出すことはできないからです。

クリスチャンでない皆さん、イエスはその招きをあなたにされています。どうぞその招きに従ってください、その招きを聞き入れてください。クリスチャンである皆さん、皆さんはその決心をされたはずです。具体的にそのことばを使ったかどうかは分かりません。でも、皆さんがした決意はそのようであったはずです。私はイエス・キリストを信じます、私はイエス・キリストの言われることが正しいと信じています。正しいならそれを行なうはずです。皆さん、エデンの園を想像してください。エデンの園で神の命令に対してアダムが不平不満を言いながら従っていたと想像できますか？できません。アダムは喜んで神の言うことを「そのとおりに」と行って行なっていたのです。私たちはアダムのようなものにされつつあるのです。確かに、私たちにはまだ罪の性質があるから葛藤があります。ときに、私たちは神が言われることをしたくないと言うかもしれません。でも、救われているなら私たちは喜んで神が求めることを「はい、分かりました、私はそれを行なって行きます」と言うはずです。どうぞ、愚かな者にならないでください。どうぞ、愚かな者でい続けしないでください。「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。」、そのことは皆さんが一番よくご存じです。